

【DQ11】 ウソバレ☆レイ  
トショー！【ざっくば  
らん書き】

千葉 仁史

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

DQ11の時を遡った先の出来事の「ウソバレ」を思い付きのまま・妄言のまま・じゃんすか・ぎつくばらん・好き勝手に書いたもの（タイトルは某イベントのもじり）。作者本人がDQXIのネタバレを知っちゃって未プレイというハイパー無責任かつ、しつかり書いたら終わらないからという理由だけで、形態は小説の形を取っていおらず（どちらかと言うとプロットに近い）、楽しく面白く読めたら、それでいいや！ ってことでゆるく書いたよん<sup>♪</sup>

主人公の名前は「イレブン」で統一。性格は陽気なお調子もん＋お馬鹿さん。

テーマは「友情」!! なので、目立つキャラに結構差あり。

タグは付けなかったけど、痛い表現も少し(?)だけあり。

※pixivからの転載だよ☆

※【魔王】を倒すまでのストーリー。

※一部FF6の技を使っているけど、同じスクエニだから許してちょ。

※グレイグが主人公の小説「Quod Erat Demonstrandum (http://syosetu.org/novel/177108)」とリンクしているけれど、読まなくて全然大丈夫☆ グレイグの行動の理由が気になる方は「Quod Erat Demonstrandum」も読んでいってね♡ 話の感想が180度ひっくり返るけれど。

# 目次

① 天上に浮く屋敷を目指して	1
② 洞窟の中で待つ者	13
③ 地獄の底へ降りていく	26

## ⑤天上に浮く屋敷を目指して

「いつでもどこでも、どんな時代だって、お前と俺は相棒だ！」

そう言つて掌を強く握り締めてくれた相棒のことを俺はいつまでも覚えてる。

「あ、起きた」

瞼を開けると、目の前に青空を背負つたペロニカがいた。彼女が生きている事実を再確認し、感動のあまり涙を流しそうになるのを必死で耐えながら、勇者ことイレブンは「此処は何処？」とすつ呆けるようにして聞いた。あつきた！ と腰に手を当てて今にも怒り出しそうなペロニカを抑えながら、セーニヤが「此処はイシの村近辺ですよ」と答える。寝転がっていた草原からイレブンは一発で起き上がると、ぷかぷか浮かぶ命の大樹を見上げながら「とりあえずオーケーかな？」と頭をガシガシと搔いた。

時のオーブを壊し、過去へ戻つたイレブンは命の大樹の付近で突つ立っていた。あれ？ 目が覚める場所は聖地ラムダとか言っていなかった？ そういえば、巻き戻す瞬間、時の番人が「あ！」と恐ろしい声を上げていたような気がするが、こりやあ場所を間違いやがったな。でも、ペロニカが生きているなら、まあいいや。これから起きることを整理しつつ、イレブンはやたらニコニコするセーニヤと何処か余所余所しい仲間

を連れて——特にカミュに疑われながら——命の大樹を登った。

さてはて勇者の剣を発見し、前回はシルビアに一番乗りされたけど今回は俺が最初に触つてやる！ と背後を気に配りながらイレブンが取ろうとした瞬間、そのシルビアが鞭で後ろからこそこそと追尾していたホメロスを鞭で一打ちした。あ、今度はそつちを取られたか。

「不意打ちとなんてさせるかよ！ ホメロス、覚悟しやがれ！」

イレブンが攻撃態勢に入るよりも早く、マルティナがホメロスに攻撃を仕掛ける。奇襲に失敗したホメロスが驚く間もなく、イレブンのパーティ全員——セーニャはともかく、珍しくカミュが遅れを取っていた——が迎撃態勢を取っていたので、吃驚するほど早く片が付いた。あの時、フルボッコにされたのが嘘のようである。よっしゃ！ とイレブンが喜んでいて、グレイグ（この世界ではまだ敵）がウルノーガに取り憑かれた王様を連れてやってきた。

（バーカバーカ。魔王め、お前の作戦は失敗だぜ！）

ふふん、と思っていると、ホメロスが魔王に命乞いをし始めた。それを見た魔王が動き出すよりも先にグレイグがホメロスの前に立ちはだかり、「陛下、貴方様より魔の物の匂いがあります」と言い出した。あれ？ このおっさん、物分かり良過ぎね？ だが、これはチャンスである。

「そうなんだよ！ この王様、魔王が取り付いてるんだ。やい、ウルノーガ！ 王様から出て行きやがれ！」

前の世界で魔王を倒したことでパワーアップした左手の紋章を掲げると、王は呻き声を上げながら倒れ、ウルノーガが現れた。悔しそうな声を漏らす魔王に「覚悟しなさい！」とベロニカが呪文を詠唱する。じいちゃんことロウが爪を構え、シルビアが鞭を鳴らし、マルティナが地面を蹴る。此処がお前の墓場だ！ と言わんばかりに飛び出した俺たちの耳に地に伏していたはずのホメロスの声が届いた。

「ウルノーガ様に手出しはさせない！」

え、アイツ、まだそんな元氣あったの？ そう思う間もなく、ホメロスが古代呪文「バシルーラ」を唱える。魔法の光に包まれたイレブンたちはあつという間に世界各地へ飛ばされてしまったのだった。

(それで飛ばされて目が覚めたら、イシの村付近ってかい。やれやれだぜ)

同じ場所に飛ばされていた双賢の姉妹と合流したイレブンは、とりあえず近場のデルカダールへ向かうことにする。示し合わせた訳ではないが、デルカダールには他の仲間が揃っていた。王様とマルティナの感動の対面を横目に、イレブンはイシの村の人々と少し感動の薄れた対面を果たす(だって前の世界で無事だったことは知っていたし)。陛下の話の聞いて、ホメロスと一緒に逃げたであろう魔王を追っ掛けることを決めたイ

レブンたちにグレイグが「俺も連れていってくれ」と仲間入りを頼んできた。

（前の世界でもグレイグのおっさんは仲間になったし、こつちの世界でも仲間になるんだなあ。これが運命ってヤツ？）

カミュは難色を示し、セーニヤは驚いた顔をしたが、他の仲間は賛成したので、イレブンはグレイグをパーティ入りさせる。

「恐らくホメロスは魔王に操られているのでしよう。軍が混乱しますので、この件はどうぞ御内密に」

（いや、あれガツツリ忠誠誓ってんだって。でも、これを知ったら、おっさん悲しむだろうし、もう少し黙ってしよう）

グレイグがそうデルカダール王に伝えるのを聞いて、イレブンは何処かヤキモキした気分になった。

兎に角も、この八人パーティでイレブンたちは改めて出立することになったのだった。

一方、その頃、ホメロスの機転により助けられたウルノーガはある山脈の洞窟に身を隠していた。オーブは奪えないわ、命の大樹は落とせないわ、部下はホメロスしかないわ、で散々な状態である。（※魔物は強い奴にしかついてこないから、命の大樹落としに失敗したので本来ついてくる予定だった魔物がついてこなかった）とどめに勇者の

証の光を直に浴びたことにより弱体化してしまったので、勇者討伐についてはホメロス（※部下はいないけれど魔軍司令コスチュームに着替え済）に委ねることにして、ウルノーガは洞窟の奥へ引つ込むことにした。

さて、後のことを任されたホメロス。回復を果たしたのち、あの忌々しい勇者たちをどう倒そうか考える。（※ウルノーガが抜刀する前にグレイグが前に立ちはだかつたので、そのウルノーガが自分を殺そうとしたことに気が付いていない）其処へエビルプリーストと名乗る魔物が「部下にしてほしい」とやってくる。見たことがない魔物だな、と思いつつも、圧倒的な部下不足の為、ホメロスは傘下へ引き入れることにした。

その頃の勇者たち御一行について。旅立ったのはいいが、魔王の逃げ先の情報があまりないため見付からず、イレブンは苛々していた。しかしイレブンは苛ついていた最大の理由は仲間の余所余所しきであった。前の世界——時を巻き戻す前では、ベロニカこそ失ってしまったが、その悲しみを力に変え、絆を高めて魔王に挑んだ。だが、時を巻き戻したことで——覚悟していたとはいえ——その絆が失われ、イレブンは仲間が『顔の見知った赤の他人』にしか見えなくなっていた。あと、『これから起こる未来が分かっている』状態でありながら、状況が遅々として進まないことも苛々の要因の一つだった。要は時を遡ったことで、これから起こることは分かっているから強くてニューゲーム状態！……と思っていたら、魔王に逃げられるわ、これから起こることが変わって分か

らないわ、仲間と高めた絆がピアになつて『顔の見知つた赤の他人』にしか見えないわ、で苛々が募つていったのである。

その結果、そんな勇者を心配し、色々と声を掛けてくれたカミュにイレブンは喧嘩をしてしまう。怒つてパーティを抜け出したカミュを連れ戻すため、ベロニカとマルティナとロウが追つ掛ける。残つたセーニャとシルビアとグレイグで勇者を諭すが、「そんなこと言つたつて、お前ら他人じゃないか」と意固地になつたイレブンはなかなか聞き入れようとしない。

とある平地にて、カミュと合流したベロニカたちはカミュを説得するが、その最中、ホメロスの強襲を受ける。しかも、その奇襲で気を失つたカミュとベロニカをホメロスは人質にしてしまった。マルティナはロウに「私が囹になるから逃げて下さい」と告げる。そんなことさせる訳には！と代わりに囹になろうとするロウにマルティナは言つた。「もうロウ様には死んでほしくないから」

その言葉にロウが疑問を覚える前に、マルティナはキメラに翼をロウに投げ、逃がしてしまつた。

マルティナによつて逃がされたロウは勇者と合流し、カミュとベロニカとマルティナがホメロスに掴まつたことを話す。仲間をもう死なさないために過去に戻つたのに、自分の我儘でピンチに陥らせてしまつた、と落ち込むイレブンを「落ち込むより先にする

ことがあるでしょ」とシルビアが発破を掛ける。ロウの背中にはホメロスからの声明文がいつのまにか貼り付けてあり、要約すると「人質を返してほしくば、天空屋敷へ来い」とのことだった。天空屋敷？ と勇者が首を傾げたとき、地面が鳴動し、屋敷が浮上する。

(※漫画「うしおととら」の高千穂空屋敷を想像してほしい)

「カミュ、ペロニカ、マルティナ！ 待つてろよ。必ず助け出してやる！」

かくして、過去にゲットしたことがあるので方法が分かっていたため楽々手にしたケトスに乗り、勇者御一行は天空屋敷を目指すことになったが、足を踏み入れた瞬間、罠(トラップ)が発動し、三つに分断されてしまう(イレブン、セーニャとロウ、シルビアとグレイグ)。イレブンに至っては分断というより落とし穴で、あと少しで地上へ強制的にお帰りされる(落とされる)ところだった。壁に剣を突き刺すことで落ちることを回避した勇者だったが、これでは身動きが取れない！ どうにかして這い上がるしかないイレブンであった。

ホメロスはというと「戦力の差を埋めるのはやっぱり奇襲が一番だな」と思いながら、勇者パーティ三人を捕まえたことに悦に入っていた。縛り上げられているのにホメロスを気丈に睨み付けるカミュとペロニカ(ちなみにマルティナは別室)の二人にホメロスは「潜入したドブネズミがどうなったか見せてやろう」と、なんとイレブンの首(！)

を見せる。それを見て真っ青になる二人。項垂れる様を見て「貴様らも後を追わせてやろう！」と高笑いするホメロスだった……が。

「よくも俺の相棒を!!」

いつのまにか縄を解き、ブチ切れたカミュに思いつきり殴られた。小癩な！ とホメロスは魔法を放つが、カミュはそれを正面から突破し、啞然とするホメロスに左手で再度殴り掛かる。

「彼奴は世界の希望だったんだ！ 彼奴がいなきや俺に生きてる意味がない！」

「ドブネズミの癖に生意気な！」

それから後はもう悲惨である。二人の乱闘は纏れに纏れ（しかも意外なことにカミュの方が優勢だ）、ダンジョンを壊しながら奥へと消えていった。残されたベロニカはしばし茫然としていたが、正気に戻ると、ホメロスが落としたイレブンの首に触れてみたと、魔法が解け、それは単なる石となった。

「カミュ、これニセモノよ！ イレブンは生きて——」

「ぎゃあああ！」

ベロニカ言葉は届かず、ホメロスの悲鳴が聞こえるだけである（それだけカミュがブチ切れて暴れているようだ）。とりあえず、ベロニカはマルティナと合流することに決めた。

一方、別檻に閉じ込められたマルティナだったが、自力で脱出していった。逃げる最中でベロニカと合流し、天空屋敷を走る二人は広いホールへ辿り着く。そのホールには二体の魔物が鎮座していた。逃げるのは此奴を倒すしかない！ と戦闘の構えを取る二人。

その頃、シルビアとグレイグは天空屋敷の広いホールに辿り着いていた。此処は？ と思っていると、二体の魔物がホールに飛び込んできた。襲い掛かる魔物に迎撃の構えを取る二人。

いうまでもなく、此処は互いの姿が魔物に見える魔法のホールだったのだ。そうとは知らずに戦い続ける四人。さて、勝敗の行方は？

セーニャとロウの二人チームはというと、圧倒的な攻撃力不足でピンチになっていた（強力なアタッカー不在チーム）。こうなれば仕方ないとロウは腹を括り、「驚くでないぞ！」とセーニャに告げ、まだ誰にも見せていなかったグランドクロスを放つ。ならば私も！ とセーニャがイオナズンを放つ。ちよつと待つて。なんで僧侶のセーニャが攻撃呪文を？ と混乱するロウにセーニャは「皆様には秘密にしてくださいね」と言っただけだった。

落とし穴に嵌まった勇者がなんとかして這い上がると、其処は天空屋敷の最下層であつた。フウと溜息を吐く間もなく、その部屋へホメロスとカミュが落ちてくる。ホメ

ロス！ と剣を構えるイレブンだったが、ホメロスの姿はスタボロであった。元気が有り余っている勇者からすると、ホメロスは一撃で倒せそうだったが、ホメロスは氣を失ったカミュを掴んでいた。大きく開いた窓辺に立ったホメロスは「好きな方を選び。私の死か、相棒の生か」と言うと、其処から飛び降りてしまう。ルーラで逃げるホメロスと地面へ真つ逆さまに落ちていくカミュ。

(※此処で選択肢。『ホメロスの死』を選ぶと、ルーラで追跡した勇者によつてホメロスを一撃で倒すことができる。その代わりに、カミュは二度と仲間にならない)

無論、勇者が選ぶのは『カミュの生』だ。瞬時に飛び降り、カミュを掴む勇者だったが、そこから先は考えていなかった。「やべっ！」と目を瞑った瞬間、ケトスに受け止められ、二人は助かった。

マルチナ&ベロニカ対シルビア&グレイグの戦いは熾烈を極めていた。最終的に相打ちとなり、四人とも倒れてしまったところへエビルプリーストが現れ、「さて死んで貰いましょうかねえ」と魔法を放とうとした瞬間、ガッツで蘇ったグレイグにエビルプリーストは斬られる。一度戦闘不能になったことでグレイグに掛かっていた『まやかしの魔法』が解けたのだ。エビルプリーストは、というと斬られても余裕綽々な顔で、この作戦を考えたのはホメロスだとグレイグに告げる。

「次はウルノーガではなく、貴方がホメロスを斬りますか？」

それだけ言い残して、エビルプリーストは逃走する。

（『次は』だと？ もしや彼奴、知っているのでは？）

そう首を傾げるグレイグの元へセーニヤとロウが合流を果たす。セーニヤによりホールの魔法を完全に除染し、六人は崩れかけた天空屋敷から勇者が連れてきたケトスに飛び移り、脱出した。

脱出したはいいが、カミュを筆頭にボロボロだったので、ドウルダ郷で休むことにした勇者御一行。そこで勇者はベロニカにより、偽の首を見せられたカミュがイレブンの為に戦ったことを教える。それを知ったイレブンは、前の世界でカミュが言っていた「いつでもどこでも、どんな時代だって、お前と俺は相棒だ！」が本当であったことを知り、「前とか今とか関係なく、カミュは相棒で、仲間は仲間なんだ」と気付き、態度を改め、パーティに謝罪する。

さて、絆を取り戻した勇者御一行だったが、あんな胸糞悪い天空屋敷に行ったものだから何かしら呪いが掛かっているのでは？ とニマ大師に言われ、ステータスチェックをされることに。そうされると知った途端、イレブンは「時が遡ったことがばれてしまおう！」と焦り、カミュ以外の仲間たちも何故か嫌がる。

それでも強制的にされた結果、勇者のレベルが高いのは勿論だったが、なんと他の皆のレベルが思っていたよりも十以上高いことが判明する。セーニヤとグレイグに至つ

ては二十以上も高い。俺って、こんなにレベル高かったっけ？ と混乱するカミユ。黙り込む仲間たち。そして、にこにこ笑うセーニヤ。

真相の行方は？

つづく

## ㊦ 洞窟の中で待つ者

「そろそろ、お話をせねばなりませんね」

話を切り出したのはセーニヤであった。

セーニヤが言うには、セーニヤ以外の『皆』が時を巻き戻した者たちであるという。つまり、此の世界は『終わりの集結点』、時を巻き戻した彼らが集まることで出来た世界らしい。それぞれが何かしらの目的を以て、それぞれの世界を遡り、集結してできたのがこの世界。

（なんでみんなが余所余所しいか分かったぜ。本当に『顔の見知った赤の他人』だったんだな。道理（どうり）で、命の大樹の時にシルビアがホメロスに先手攻撃ができたのも、俺が「王が憑りつかれている」と言ったときも皆疑わずに攻撃できたのも、そういう訳か）

納得する勇者。そして、セーニヤ自身は他の世界のセーニヤの意識が集まって出来たキュレーター（案内人）とのこと。だからレベルも能力もダンチだったのだ。

だがしかし、カミユは自分が時を遡ったことを覚えていなかった。セーニヤ曰く、時送りのショックで一時的な記憶喪失ではないか、とのこと。皆、戻った理由は言わな

かったが、勇者は「ペロニカを助けるために、その世界の『俺』が行けなかったから代わりに皆戻ってきた」と思っている。

（※あれっ？ そう考えるとペロニカ自身は何処から来たのか？ このペロニカも時を遡ってきたの？ 今の勇者はそこまで考えが及んでいない）

（※時送りするためには紋章と証が必要だが、勇者以外の者が使用すると、時送りした後が消えてしまうようだ。だから、勇者以外は誰も剣や紋章を持っていない）

（※カミュは自分が時送りに気が付いていない。要は一時的な記憶喪失状態だ。だから、命の大樹の際、何が起るか分からずにまごまごしてしまっていた）

（※それでは、その時、どうしてセーニヤも動けなかったのか？ 他の世界のセーニヤの意識が集まって出来たキュレーターならば、何が起るか分かっていたはずだ。動けない制約があったのか、それとも……？）

さて、皆が皆もう事情を知っているという訳なので、カミュは「黄金化した妹マヤを助けてくれ」を頼む。かくして、勇者たちはクレイモランへ向かうことにした。

一方、カミュによってポロ雑巾にされ、命からがら逃げ帰ったホメロスは魔王に叱責され、もう一度チャンスを与えられていた。勇者たちのあまりの強さ——命の大樹前に会ったときはまるでレベルが違い過ぎることに疑問を抱くホメロスにエビルプリーストが「彼奴は皆、未来から来たのです」と教える。

「未来からきただと!？」

「ええ、彼奴等は未来から時を遡ってきたのです。だから、誰も貴方に気を配らないのです。本来の貴方は命の大樹の元で魔王に殺されていたのですから」

「何故、貴様がそんなことを知っている!? 私がウルノーガ様に斬られるなんて、いい加減なことを言うな!」

怒るホメロスにエビルプリーストは魔法を使って別世界の過去を追体験させる。

「これがカミュの来た世界の過去」

「これがベロニカの来た世界の過去」

「これがシルビアの来た世界の過去」

「これがマルティナの来た世界の過去」

「これがロウの来た世界の過去」

「これがグレイグの来た世界の過去」

「これがイレブンの——」

「もうやめてくれ!!」

何度も無様に惨めに哀れに、何かを成し遂げることなく主君に殺される追体験をしたホメロスはイレブンの映像を見ることなく絶叫する。唯一自分を認めた下さった主君に失望される絶望と死への恐怖に顔が真っ青になるホメロス。

「彼奴等は魔王を倒した未来から来ました。つまり、魔王より強いのです。貴方が勝てる余地はありません」

「うるさい！ 彼奴等の戦力を削ぐことが出来れば、ウルノーガ様は俺に失望したりしない！ 俺があの方に殺されることもない！」

エビルプリーストの言葉にホメロスが反論する。そして、この自分をボコボコにしたカミュへの怒りを募らせながら如何にあの盗賊を苦しめるかを考えに考えた。

クレイモランについた勇者御一行だったが、洞窟の奥にマヤの黄金像はなかった。代わりにホメロスの伝言メッセージ（※漫画『魔法陣グルグル』の具象気体みたいなイメージ）があり、「マヤを返してほしくば、シケスピア雪原の奥にある洞窟に來い」と告げられる。百パーセント罨だと分かっていたが、マヤを助けるため、勇者たちは飛び込むことを決める。

さてはて、勇者御一行は雪原奥に作られたダンジョンを進み、最後の部屋に辿りついた……が、その瞬間、カミュ以外のパーティは上から降ってきた檻に閉じ込められてしまう。勿論、ホメロスの仕業だ。その部屋の奥にある祭壇には黄金化されたマヤが横に寝かされ、その上の天井には重しがぶら下がっていた。そして、祭壇の前には人型のくぼみ（頭・胴・右手・左手・右足・左足と分かれている）がある石台が置かれている。高笑いしながら現れたホメロスが告げたのは世にも恐ろしいゲーム内容だった。

「カミュよ。貴様と仲間を使って、この石台にパーツを捧げろ。埋まったパーツの部分だけ妹を助けてやる。ただし、一人で補うことはできるパーツは二つまでだ。パーティの『誰』を使うかは貴様に一存させてやる。感謝しろ」

つまり、体を切り取った部分だけマヤを『無事に』返してやるということだ。頭や胴のパーツを捧げたものは命がないし、これから魔王と戦うのに手足が無くては戦えなくなってしまう。

「俺の命はくれてやる！ だから仲間を巻き込むな！」

「言っただけで、一人で補えるパーツは二つまでだ。貴様が頭と胴を捧げれば、其処だけは重しで壊さないで置いてやる。そうすれば、貴様の命とは引き換えに妹の命は助かるな、『命だけ』は」

カミュの懇願をホメロスは鼻で笑う。なんて卑劣な真似を！ と怒る勇者メンツにホメロスは笑いながら、こう答えただけだった。

「だったら、マヤを助けるために貴様らが命か体のパーツを差し出せばいいだけの話だ。『私は関係ない』なんてつまらないことを言わないでくれよ。優しい勇者御一行殿」

ホメロスの魔法で大きな砂時計が現れる。あの砂が落ち切るまでが『決断』のときだ。勇者メンツでただ一人檻に閉じ込められなかったカミュは蹲って頭を抱える。皆が皆、檻を破壊しようとするが、なかなか破壊できない。どうすればいい！ と悩むカミュを

ホメロスは「早く決めろ、妹が大事なんだろ」と囁いながら追い詰める。

「そういえば、貴様、時を遡る前の記憶がないんだったな。決断させる良い材料をやるう」

砂時計の砂があと少しになったところでホメロスは鼻歌をしそうなくらいの足取りでカミュに近付き、その頭をガシリと掴んだ。そして、エビルプリーストに教えて貰った通りに魔法を発動させ、カミュの記憶のロックを解いた。

カミュが時を遡った理由はマヤの為だった。

ラムダの里以降、少し変わってしまったような気がするが、まるで総てを見通したかのような行動をする勇者に心を許したカミュは黄金化された妹の話をする。ところが、クレイモランの洞窟に妹の黄金像はなかった。バイキングが先に見付けてしまったのだ。マヤを取り戻すためバイキングと戦う勇者たち。だが、あと少しと言うところで手を滑らせたバイキングがマヤの黄金像を谷底へ落としてしまう。砕ける音が響く。駆け付けたところで時すでに遅し、マヤは頭部を残して粉々に砕け散っていた。

(※カミュが勇者の偽頭部を見てブチ切れたのは、このため)

しかも、頭部だけになったので首飾りが取れ、彼女は生身の身体に戻っていた。だが、これではもう蘇生できない。残された妹の頭部を抱いて、カミュは慟哭した。

それでも勇者の為に、とカミュは仲間と共に旅を続け、世界の『真』の平和を取り戻

した。仲間はそのそれぞれの故郷へ戻っていくなか、カミュは妹の墓の前に立っていた。

「勇者を支えるという俺の役目は終わった、もうこの世界にいる意味はない。マヤ、助けられなくてごめん。今、そっちに行くから」

そう言つてナイフを首に向けるカミュを止める者がいた。勇者だった。勇者は「見せたいものがあるんだ」と告げた。

勇者に連れて来られた先は見も知らぬ塔だった。まるで一度来たことがあるように迷わずに真つ直ぐに最深部まで辿り着いた勇者はカミュに言った——あのオーブをこの勇者の剣で壊せば過去に戻れる、と。

「お前はすつと俺を支えてくれた。カミュ、お前は大事な相棒であつて友達だから、マヤを助けて、その憂いを絶つてほしい。この左手を掴んでくれ、これが俺からお前に出来る最後のプレゼントだ」

カミュは勇者から渡された剣を右手で受け取る。最後に握手を、と勇者から伸ばされた左手を、同じように左手で握り返す。すると、左手が光り輝き——。

カミュの記憶が完全に戻る。勝つたと言わんばかりに高笑いするホメロスを余所に、頭を放されたカミュはゆらりと立ち上がった。砂時計の砂はもう本当にあと僅かだ。その最中、イレブンが叫んだ。

「カミュ、俺を使え！」

檻の隙間から伸ばした勇者の左手をカミュも同じように左手で掴む。途端、二人の左手の甲が黄金に輝いた。勇者の光に魔族であるホメロスが苦しみ、皆を閉じ込めていた檻が消えていく。カミュの左手の甲には勇者の紋章があつた。カミュの記憶が消えていたのは、同じように紋章を継承した皆よりも強いエネルギーを——時送りしても消えない程のエネルギーを渡されていた故の後遺症だったのだ。

今、こうして二人目の勇者が誕生した。焦つたホメロスは重しを縛っていた縄を断ち切る。黄金化したマヤ目掛けて落ちる重し。

「いけ、カミュー！」

「おうー！」

カミュは光よりも早く駆け出し、重しが落ちる前に妹を助け出した。勇者の証の光を受け、マヤの黄金化が解ける。とうとう二人は出会えたのだつた。

勇者メンツの力を削ぐどころか、第二の勇者まで目覚めさせてしまったことに慌てるホメロス。

「もう許さんぞ、ホメロスー！」

勇者の光を浴びて弱つたホメロスにグレイグが斬りかかる。しかし、ホメロスは難なく躲し、ドラゴンを召喚すると逃げてしまう。そのドラゴンは昔デルカダール軍が束になって倒したドラゴンであつた。どうやら、ホメロスは己の魔力を使うことで、今まで

倒した魔物のレプリカを複製できるようだ。

みんなで力を合わせてドラゴンを退治すると、レプリカドラゴンは泡のように弾けたあと何も残さずに消えてしまった。そして、パーティは改めて互いの無事を確認する。

「それにしても、イレブン、いつカミュが勇者の証を継続出来ていたことを知っていたの？」

「そうよ！ そうじゃなきゃ、手なんか差し出せないじゃない？」

「いや、知らなかったぜ、そんなこと」

「イレブン、どういうことじゃ？」

「カミュが苦しんでいるのを見たら、じっとしていることが出来なかったんだ。奇跡とか考えていなかった。ただそれだけの話」

「お前、馬鹿だろ！ 勇者であるお前がいなくなったらどうすんだー！」

「それでも何かしたかったんだ、お前は俺の大事な友人だからー！」

「イレブン様も無茶なさいますねえ」

わあわあきやあきやあと仲間と一緒にあって、友情を確認するイレブンとカミュ。その少し離れたところではグレイグはホメロスが落としていった黒い羽根を掴み、物思いに沈んでいた。

「どうしたの、グレイグ。貴方らしくないわね」

『ゴリアテ』か。俺は強い決心をして此処まで来たが、『揺るがない覚悟』と言うのはやはり難しいものだな」

それ以上、グレイグは何も言わなかったが、シルビアにはグレイグが親友であるホメロスを戦うことに悩みを抱えていることを見抜いていた。グレイグはこの手で友を討つことに苦しみを感じているのだろう、とシルビアは思った。

「貴方がどんな選択をしたって、私たちは貴方の味方よ、グレイグ」

「ありがとう、ゴリアテ」

グレイグがそう言つて羽を指の腹で擦ると、跡形もなく羽は消え去ってしまった。

クレイモランのキャンプ場に戻り、「時を遡つた理由をここ等で白状してしまいましよう」というセーニヤの言葉を皮切りに皆事情を話し始めた。まずはカミュが妹を助けるために時を遡つたことを告白した。次にイレブンがベロニカを助けるために戻つたことを話し、皆をびっくりさせる。

(※此処ではじめて、イレブンは皆が自分とは違うルートで魔王を倒したことに気付く。つまり、イレブンとセーニヤ以外は本来の二週目ルートから飛んできてる)

他のメンツとはいうと、魔王を倒してから現れた脅威(※邪神ニズゼルファのことだが、一週目の世界から来たイレブンは知らない)によつて失つた仲間の為に戻つたという。

ベロニカはカミュとセーニヤとシルビアとグレイグ。

シルビアはカミュとベロニカとロウとグレイグ。

マルティナはカミュとロウとシルビアとグレイグ。

ロウはカミュとベロニカとシルビアとグレイグ。

(※マルティナが「もうロウ様には死んでほしくないから」と言ったのはこのため。それぞれ四人ずつ亡くなっているのは邪神の最後の攻撃で誰かが誰かを庇ったせい。なので、グレイグはマルティナを庇って百パーセント亡くなっている)

(※つまり、カミュはイレブンを、セーニヤはベロニカを、ベロニカはセーニヤを、との具合である。騎士道溢れるが故にシルビアは、若者の未来を守るためにロウは、それぞれ仲間の壁になったのだろう)

(※ちなみに、カミュは邪神をみんなで生きて倒すことができたが、マヤを助けるために戻って来ている)

時送りが出来るのは、例え本物の勇者でも『一回』だけ。その為、勇者の代わりにマルティナたちは戻ってきたようだ。魔王よりも強い敵がいて、それで半数の仲間を失うのか、とショックを受けるイレブン。

(ん？　じゃあ、グレイグのおっさんは？)

最後まで黙っているグレイグに皆が視線だけで喋るように促すと、彼は「今は話せま

せん」と言っただけだった。

「もしかすると、これよりもひどい未来から来たの？」

「いや、ベロニカ、貴殿も含めて誰も邪神との戦いで命を落としていない」

「？　じゃあ、俺の妹は？」

「ちゃんと勇者殿が助けている」

「??　命の大樹が落ちたとか？」

「勇者殿、命の大樹も無事です」

「???　え、じゃあ貴方、どの未来よりも最良の未来から戻ってきたってこと？」

「そうなりますね、姫様。あの塔も自力で見付け出しました。……俺にとって『あの世界』は最良じゃなかっただけですよ」

これ以上は話せません。時期が来たら必ず話しますのでどうかご容赦を、と頭を下げるグレイグに首を捻るイレブンたちであった。

さてはて、またもや逃げ帰ることになった魔軍司令ホメロス。今度は確実に処刑ものなので、その足取りは重い。其処へエビルプリーストが現れる。死の追体験を散々味わったことで、死への恐怖に侵されていたホメロスにエビルプリーストは「生き延びる方法があります」と告げ、謎の秘薬を渡す。

「これは『進化の秘薬』と言います。『私の世界』から持ってきた代物です。これを使え

ば飛躍的にパワーアップできます。そして、魔族という生き物は倒した魔族の力を吸収して強くなれます」

『私の世界』？ いや、今はそんなことはどうでもいい。何故それを今も今まで渡さなかつた？」

「魔王を一度倒したことがある勇者たちにこれを使ったところで付焼刃にしかならず、あまり意味はないでしょう。それに元々底力のある魔王に手渡しても効果は薄いですし」

「何が言いたい？」

「人間の言葉でいうのなら『先手必勝』ですかね。やられる前にやってしまえばいい。……ところで、魔軍司令殿、戦力の差を埋めるには何が有効でしょうか？」

笑うエビルプリーストからホメロスは進化の秘薬をひったくる。そして、死の恐怖と戦う術を手に入れた彼はこう告げたのだった——「奇襲だ」と。

つづく

## Ⓣ地獄の底へ降りていく

ベロニカが言うには、逃げ帰るホメロスに魔法のマーキングを行ったとのこと。地図でその場所を確認したイレブン一考は早速向かうことを決める。その前にパーティに話を聞くと、シルビアから『『ミナディン』はとっておきの呪文だから使う時を考えなさいね』と忠告を受ける。

(※ちなみにマヤはクレイモランで預かってもらい、カミュとの会話を済ませているが割愛)

山脈のとある洞窟に入った途端、魔法が発動し、洞窟内だというのに天空魔城のような内装に変わっていく(その内装を知っているのはイレブンだけだが)。一階のエントランスを探索していたイレブンだったが、トラップを発動させてしまい、「またかよおやおお！」と叫びながら落ちていく。その落とし穴が閉じる前に慌ててカミュとサーニャとグレイグが飛び込む。こうして、地上階と地底階にまたもやパーティは分断されてしまった。仕方なく、マルティナたちは最上階を、イレブンは最下層を目指していくことに。

攻撃呪文を使うサーニャに既視感を覚えつつ、勇者しか使えない呪文を使うカミュに

頼もしさを感じつつ、『魔封剣』といって相手の魔法を吸い込み自身のMPにしてしまう新技を使うグレイグに「前の世界でも持たことないなあ」と思いつつ、勇者は敵を薙ぎ払っていく。

(※ウルノーガは命の大樹落としに失敗したので、魔物の大半が呆れて付いてきていない状態のため、ブギー達すらいない。しかも、過去の世界とは言え、既に一回は魔王を倒したことがあるうえ、カミュも勇者の力が使えるので、イレブンたちは若干楽観的である)

途中で『何か』の断末魔の叫びが響き、上から下へと城の内装がガラリと変わる。そういう仕様か？ と大して疑問を思わず、イレブンたちは下っていく。

最下層についてイレブンたちは、とうとう魔王に対面する。会話のやり取りは二回目なのでカットして(酷い)、イレブンたちは全力で戦う。既に魔王を倒した経験があるので苦戦することなく倒し、やったあ！ と喜ぶイレブンたち。

ところが、ウルノーガの死体は泡のように弾けたあと何も残さずに消えてしまった。

「おい。これってどういうことだ？」

「まるで雪原の洞窟で戦ったレプリカドラゴンのように消えてしまいましたわ」

「レプリカドラゴン？ ……ということとは」

「ウルノーガは既に倒されている……？」

カミュ・セーニャ・グレイグ・イレブンが真つ青な顔でお互いの顔を見合わせるなか、最上階に着いたベロニカから魔法でテレパシーが届く。なんと魔王の死体が最上階の部屋にあるらしい。その死体の横で謎の魔法陣が描かれて——という通信を最後に途切れてしまう。レプリカ魔王を倒した部屋の奥の扉が開く。あれが最後の部屋のようだ。行こう、そう言ったのはグレイグだった。

真つ暗な部屋の中、イレブンたちが歩いていく度に炎が灯っていく。

(※クロノトリガーの魔王城みたいな感じ)

その奥の玉座に座っていたのはホメロスであった！

なんと、此奴は自分が魔王に殺されなかったために『進化の秘薬』を使って自身を強化し、奇襲してウルノーガを倒した後、その力を吸収して新魔王になったというのだ！

(※途中で聞こえきた断末魔の叫びはウルノーガによるもの。城の内装が上から下へ変わったのは魔王を倒したホメロスがイレブンを倒すために最上階から最下層へワープしたため、そして魔王の力がウルノーガからホメロスに移行したので内装まで変更された)

「俺を認めない世界なんて滅んでしまえばいい!!」

凄まじい極論を語るホメロスに思わずドン引きしてしまうイレブンたち。だが、此奴を倒せば世界は救われる。一度倒したことがあるから、と思うイレブンだったが、進化

の秘薬を使用したホメロスの姿はメキメキと凶悪で凶暴、悍ましい魔物の姿へ変わっていく。

(※DQ4のデスピサロ参照。あんな感じの面影0の姿へ)

「魔王は勇者によって倒される宿命(さだめ)、ならば勇者は新魔王によって倒される宿命なのだ!!」

新魔王ホメロスが襲い掛かってきた!

その頃、最上階において。

魔王ウルノーガの死体を見付けたマルティナたちは驚いていた。いったい何がどうなっているのか? 混乱する間もなく、魔王の死骸の横でウロチョロしていたエビルプリーストが魔法陣を完成させ、魔王の死骸を生贄に古代の邪神シドーを召喚してしまった。(※DQ2参照)マジかよ、と顔が引き攣る一同。エビルプリーストは召喚するだけ召喚して逃げてしまったので、マルティナたちはシドーと戦う羽目になった。

さてはて、こちらは最下層。

元々あった力+進化の秘薬+魔王ウルノーガを倒したことで得た力でパワーアップした新魔王ホメロスは阿呆なほど強かった。魔法も物理攻撃もバンバンかましてくるし、状態異常呪文は相変わらずだし、無駄に頭がいいからハメ技使ってくるし(格格ゲーかよ)でイレブンたちを散々苦しめた。一度倒したが、お約束の変身(第二形態)を経

て再戦。化け物姿から魔族の王らしい姿に変わったホメロスは更なる強さで襲い掛かる。

それをどうにか倒すと、ホメロスはデルカダール国の將軍の白い鎧姿になる。変身状態を維持できない程、力が弱まってきたのだ。だが、死にそうなのはイレブンたちも一緒である。

ホメロスが新魔王の力で得たしんくうはを放つ。その軌道にいたセーニヤをカミュが押し退けたが、それによつて体勢を崩してしまい、そこを狙ったホメロスにドルマドンを詠唱される。マジか！と思わず身構えたカミュをイレブンが助け起こす。

(※最初、デルカダールの牢屋から脱出した際、ドラゴンに追っ掛けられた際、カミュが勇者を助けているが、そのオマージュで今度は逆になっている)

二人で走りながら、互いに左手の紋章に力を込める。使うなら、もう今しかないだろう。強く頷くと、二人の勇者は勇者にしか使えない呪文を詠唱した。

「ミナデイン!!」

その一瞬、イレブンはペロニカの声を聞いた。ペロニカはペロニカでも此方の世界ではなく、前の世界の彼女だった。ペロニカだけじゃない、カミュや他の仲間たちの声も聞こえてくる。無論、カミュも前の世界の——過去に戻る方法を教えてくれた勇者の声を聞いていた。此方の世界のシルビアが『ミナデイン』はとっておきの呪文だから使

う時を考えなさいね」といつていたことを思い出す。ミナデインは仲間のMPを使う呪文——今の世界だけでなく、前の世界の仲間がイレブンとカミュに力を貸している。このミナデインはこの世界の仲間だけでなく、前の世界の仲間のMPまで使用しているのだ！

空気が裂ける音が響く。超特大級の稲妻が新魔王を襲う。悲鳴も生命も望みすら燃やし尽くす大量の光と音が最終ダンジョン内に響き渡る。あまりの衝撃にセーニャはしゃがみ込み、イレブンとカミュはすつころんでしまう程だった。

どれくらい長さだっただろうか。衝撃が過ぎ去り、舞い上がった煙と灰塵が晴れていく。新旧の仲間の想いを込めた究極呪文により倒される巨悪、なんてすばらしいファンファーレ！

「new page」

……になる予定だった。灰塵が消えた後で現れた影にイレブンたちは息を呑んだ。其処には前の世界で「勇者の盾になる」と誓った大男の姿があったからだ。

なんと、グレイグは新魔王の前に立ち、相手の魔法を吸収するという新技『魔封剣』であのミナデインを受け止め——すさまじい勢いだったからか完全に相殺できず、グレイグの身体はボロボロであったが——ホメロスを守ったのだった！

「おっさん!!? なんて——」

「死ねえ！ グレイグ!!」

イレブンが正気に戻るよりも先にホメロスがグレイグに斬りかかった。英雄は避けることも剣で受け止めることなく左目を斬られた。鮮血が散り、セーニヤが悲鳴をあげる。どうしてだよ、と呆然とするイレブンとカミュ。MPは0だ、もうどうにも戦えない。絶望が蔓延するなか、自身もズタボロというのにホメロスは高笑いを上げた。

「ハーツハツハツハツ！ ザマアないな、グレイグ！ 騎士の命たる眼を斬られちゃあ、もう貴様も戦えまい！ 敵に情けを掛けるからこんなことになるのだ!!」

「違う」

「違うだと？ いったい何が違うというのだ！ これを情けと言わず、なんと——」

「お前を敵だと思ったことは一度もない！」

グレイグの言葉にホメロスの勢いが止まった。勇者たちもぼかんとしてしまう。グレイグは小さな息を吐くと、左目から血を流したまま喋り始めた。

「ホメロス。こうしてお前と正面向いて話すのも久しぶりだな、此処まで来るのに『七年』も掛かってしまった」

七年？ その年月にイレブンは「あ！」と小さく叫んだ。イレブンは盛大な勘違いをしていた。他の仲間が時送りしたのは、パーティメンバーを失ってからのすぐの行動だった。だから、イレブンはグレイグもまたすぐ時送りしたと思ひ込んでいたが、そう

ではない。彼は自力であの塔へ辿り着くのに七年も掛かったのだ。だから、彼だけ異様にレベルが高く、知らない技も多かったのだ。

「あの塔の番人に言われた、今からお前が助けようとしている男は『総て』を捨てなければ助けられん、と。だから、俺は此処までくるのに『総て』を捨ててやってきた」

「総て……？」

「武勇も地位も権力も栄光も名誉も未来も望郷への想いも今まで積み上げた己自身の歴史も何もかもを、そして今此処で左目も捨てて、お前がいる地獄の底まで降りてきた」  
グレイグの背負う重みは同じ地位に就いていたホメロスだからこそ、すぐに理解できた。そんな自分の命を捨てるよりも重いものを、彼は投げ捨ててきたというのだ。

「俺は王に拾われて以来、お前の背中を追い続けてきた。その優しさに追い付きたかったんだ。お前こそが俺の光だったんだ。今の俺があるのはお前のおかげだ。ホメロス、どうしてそれが……」

グレイグはそう言いかけて言い直した。

「どうしてもそれを生きているお前に伝えたかった」

グレイグ、と親友の名を呟くとホメロスはその場に崩れ降ちた。だが、イレブンが一度見た光景のように彼の姿は消えることはなかった。蹲るその姿は幼い子のようにも老人のようにも見えた。

「おじさまが救いたかったのはホメロス様だったのですね」

「ああ、だから『あの時』は喋れなかったんだな」

「魔王は勇者によって倒される宿命（さだめ）……でも、新魔王を救えるのは親友だけだっただけか」

啜り泣きが静かに響くなか、洞窟が本来の姿を取り戻していく。勇者たちは魔王に勝ったのだった。

その頃、死ぬ思いでシドーを倒したマルティナたちは入口へ戻っていた。急に城が洞窟に戻ったことに驚いたが、「魔王が倒れて、その魔力を失ったから」とベロニカの推測にイレブンたちが魔王を倒したことに安堵の息を吐いた。入口で待っていると、イレブンが現れた。「とりあえず、魔王は倒したかな。とりあえずは」と言いながら、顔がげっそりとしている。次に現れたのはカミュだった。彼は何処か苦々しい顔をしている。三番目に現れたのはセーニヤだった。彼女は苦笑いを浮かべている。四番目に現れたのは左目が潰れたグレイグだったので、マルティナたちはびくりして悲鳴を上げた。

「ちよつと、グレイグ！」

「いったいどうしたんじゃ!？」

「何があつたのよ!？」

「ん？ まだ誰かいるわね？」

シルビアが首を傾げる。五番目に現れたのはホメロスだった。顔は俯いていて、酷く憔悴しきっているのが誰の眼にも明らかであった。ちよつとどういうこと!?! とキレ気味なベロニカにイレブンはお手上げと言いたげに両手を上げながら、こう言ったのだった。

「新魔王、連れて帰っちゃいました」

とりあえず、近場のキャンプ場でイレブンたちは休むことになった。マルティナたちから質問攻めにあうグレイグだったが、本懐を達せたことがそんなに嬉しいのか、左目を失ったのにも関わらず、朗らかに笑いながら「申し訳ありません」と謝り続けた。

さて、これからどうするのか。そんな話題になった時、カミュは妹と旅に出ると言った。本当は相棒とも一緒に行きたいんだけどな、とカミュが思っていると、イレブンもまた「俺も旅に出る。今度は平和になった世界を見て歩きたいんだ」と言った。そうだよな、此奴は王族だし、一緒に旅なんてもう出れないよな、と落ち込みながらカミュは「何処かで会つたらよろしくな」とイレブんに声を掛ける。すると、イレブンは瞳を大きくして「カミュとマヤの三人で旅に出るのに、なんでそんなことを言うんだ?」と言った。その言葉にカミュはじわじわと嬉しきを感じてくる。カミュは握り拳を作り、イレブンのそれに合わせると「これからもよろしくな、相棒!」と笑った。その瞬間、役目を果たしたカミュの左手の甲から焚火の火花のように紋章が消えていった。

ロウはユグノア再建の為に国へ戻り、ベロニカとセーニヤはそれの手伝いをするという。シルビアは笑顔をばらまくためサーカスへ戻り、マルティナもデルカダールへ戻るとのこと。

「グレイグも戻ってくれるよね」

「申し訳ございませんが、姫様、俺は戻りません」

マルティナの言葉にグレイグははつきりと断った。

「俺はホメロスを連れて旅に出ます。彼奴をもう独りにする訳にいきませんから」

唾然とする皆にグレイグは「これが俺の揺るがない覚悟です」と頭を下げると、魔族ゆえにキャンプ地に近寄れず、背を向けて蹲るホメロスの元へ歩いていった。ぽかんとするマルティナの肩を優しくシルビアが叩き、首を横に振った。

グレイグはホメロスと背中合わせに座ると、一つしかない右目を細めながら「一緒に旅に出るぞ。最初は何処へ行こうか。まずは魔族から人間に戻す方法を探さないと」と朗らかに告げる。本当に本気でグレイグは親友の為に『総て』を捨てる気であることを知ってしまった、ホメロスは更に膝の間に顔を埋めた。

翌日、皆は皆の目的の場所へ去っていった。イレブンはカミュとマヤと旅に出て、シルビアはサーカスへ、ロウとベロニカとセーニヤはユグノアへ、マルティナはデルカダールへ、そしてグレイグとホメロスは当てのない旅へ。

「姫様、御免！」

グレイグは再度謝ると、ホメロスを連れて歩き出した。ホメロスは俯いたまま深く頭を下げると、その背は二度と見ないと断っていたグレイグの背を追っ掛けて行った。マルティナが「グレイグのバーカ！」と叫ぶ。涙を拭うと、姫は故郷の国へと足を向けた。次の脅威の兆しはまだ表れていない。それまで束の間の平和を勇者たちは享受したのだった。

おわり